

そうだったの!?

言葉や国語について考えるこの欄は、文化庁の「国語に関する世論調査」などを参考にしている。

猫も杓子も

「猫も杓子も～」偉い人もつまらない人間も、例外なくすべて、と新明解国語辞典にはある。だれもかれも、なにもかも、とは大辞泉だ。よく使う言葉だが、「杓子」とはどんな意味があるのだろうか。「杓子定規にはいかないよ」なんて表現もある。

杓子とは、飯を盛ったり汁をすくったりする道具で、底が丸く中にくぼみがある皿形で柄がついている。なぜここに猫が登場するのか。岩波ことわざ辞典によると、江戸時代から諸

説あったようだ。

猫が蝶番(ちょうつがい)杓子というものに似ているからとしたのが江戸後期の随筆「嬉遊笑覧」。「女子も弱子」(めこもじゃくしも)が訛ったものだとか、売笑婦と講釈師の意である「寝子も釈氏も」からだとしたものがある。

分かったのは江戸時代からの言い方だということくらい。常用されているわりには不明な点が多い。

「杓子定規」は説明がつく。曲

がっている杓子を定規代わりにすること、正しくない定規ではかることの意味から、すべてのことを一つの標準や規則に当てはめて処置しようとする、融通のきかないやり方や態度。

「杓子」は主婦権の象徴とみなされるようで、「杓子を渡す」との言い方は、姑が嫁に家政を譲ることをいう。

「猫も杓子も～」の現代版解釈は、おばあちゃんから猫まで、家中が夢中になることを言うのだろうか。それってス・マ・ホ?!